

中学校における自他への信頼を育む学級集団づくり

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
藪下 和 仁

実習責任教員 阿 形 恒 秀
実習指導教員 池 田 誠 喜

キーワード: 人間関係づくり, 社会的スキル, 自尊感情, 信頼

I 課題設定の理由

1 課題設定の背景

これまでの教師生活では、生徒間の人間関係のトラブルへの対応に追われることがあった。そこで、生徒の社会性や人間関係づくりの力を高め、ストレスを軽減できる力を育成することで、不適応状態にいたるまでの生徒同士のトラブルを未然に防ぐことができるのではないかと考えた。そして、教師による共感的な生徒理解のもとで、これらの取り組みが有機的なつながりを持ち、望ましい学級集団を育み、生徒の充実した中学校生活を実現できるものと考えた。

2 実習校について

実習校は、7学級、生徒数118名の小規模中学校である。「生徒の学力を向上させること」「生徒の規範意識を向上させること」「生徒に社会性を身に付けさせること」の3点を重点目標に掲げ、教職員一丸となって目標実現に努めている。

平成31年2月に、教職員を対象に生徒の実態について聞き取り調査を行った。

実習校の生徒の良さは、

- ・明るく素直であること
- ・落ち着いた学校生活が送れていること
- ・爽やかな挨拶ができること
- ・自分をより高めたいと願う気持ちが強く学習意欲が高いこと

などが挙げられた。一方、課題としては、

- ・他者との関わり方が十分とは言えず、些細なことが人間関係でのトラブルにつながりやすいこと
- ・基礎学力が十分に身につけていないため、自己肯定感が低いこと

などが挙げられた。また、一部には規範意識が低い生徒や、感情のコントロールができないことで落ち着いた学校生活を送れない生徒もいることも挙げられた。

3 先行研究から

國分(1999)は、「『生徒の自己理解』や『達成感・充実感』を教師と生徒、生徒同士が共有することで、良い人間関係が形成される」と述べている。本実践研究では、「対人関係プログラム」「生徒理解」「学習支援」の三本柱を通して、生徒の自己理解や達成感・充実感を促進させる。このことにより、教師と生徒、生徒同士の間に望ましい人間関係が構築されるのではないかと考えた。

II 実践研究について

1 実践研究の概要

「対人関係プログラム」では、学校生活や学校行事と関連させながら、S G E、アンガーマネジメント、リフレーミング、アサーション・トレーニングの手法を取り入れた授業を展開し、生徒のコミュニケーションの技能を高め、仲間との望ましい人間関係を築くことを目指した。「生徒理解」では、生徒の様子や、教師の

生徒指導への思いなどを教師間で共有することで、生徒の豊かな成長を支援し、教師と生徒の信頼関係を強めることを目指した。「学習支援」では、生徒の学力のつまづきを踏まえた支援を行うことで、生徒の学習意欲の向上や基礎学力の定着を図るとともに、生徒の自尊感情を高め、教師と生徒の信頼関係を深めることを目指した。

2 実践研究の目的

文部科学省（2018）は、「好ましい人間関係を基礎に豊かな集団生活が営まれる学級や学校の教育的環境を形成することは、生徒指導の充実の基盤であり、かつ生徒指導の重要な目標の1つでもある」と述べている。そこで、本実践研究は、生徒の自己理解や達成感・充実感を学級で共有し、一人一人の生徒の自己肯定感を高め、好ましい人間関係に基づく温かい学級風土を醸成し、生徒が安心と充実を感じられるような学級集団を築くことを目的とする。

3 実践研究の計画

実習では、「互いを知る力」「自己開示の力」「自己主張の力」の3つの力を育む授業を進めることを計画した。1つ目の「互いを知る力」では、本音が言いあえ、互いを受け入れあえるという相互の信頼関係を醸成し、安心して自己開示ができるための土台をつくる。2つ目の「自己開示の力」では、今までに気がつかなかった自分や、友だちの多様な考えに触れることで、気づきの幅を広げていく。3つ目の「自己主張の力」では、自分の気持ちを上手にコントロールすることで、互いの主張を尊重しあえるスキルを身につける。これらの授業を通じて、相互に尊重しあえる関係を築いていく。さらに、学習支援を進めることで、生徒の基礎学力を高め、教師と生徒の信頼関係を強める。以上のことか

ら、学級や学校の望ましい人間関係を構築し、自他への信頼を育んでいく学級集団づくりに寄与する。

III 実践研究の実際

1 対人関係プログラム

(1) SGEを取り入れた授業

「中学校へ入学し不安いっぱいの子の心理的負担を軽減すること」と「生活の窓口になる担任のいろいろな面を知り担任への信頼感を養うこと」をねらいとして、「担任の先生を知る4択クイズ」を実施した。生徒の高まった緊張がほぐれ肩の力が抜け、担任や学級の友達と楽しみながら過ごせる時間になるよう努めた。

また、生徒同士の仲間づくりの契機となるよう、生徒が仲間と段階的に関わり合いながら、友だちのことを理解し、学級での不安や緊張を軽減させることをねらいとして、「アドジャン・トーキング」を実施した。

さらに、「宿泊学習を通して仲間が見つけてくれた自分の良さを知り、それに気づくこと」と「友だちの良さを肯定的に受け入れていこうとする支持的・受容的な学級の雰囲気をつくること」をねらいとして、「いいとこさがし」を実施した。

(2) アンガーマネージメントを取り入れた授業

自分自身の感情と適切に向き合っていくための方法として、「怒りを適切な方法で解放する手段を知り、自分のストレスを緩和する」ことをねらいとした授業を展開した。

(3) リフレーミングを取り入れた授業

「生徒が自分の良さを再認識し、自尊感情がさらに高まる」ことをねらいとして授業を行った。

(4) アサーション・トレーニングを取り入れた授業

生徒は、人とのコミュニケーションの中で、

自分の言いたいことを言えなかったり、遠回しに言ったり、相手のことを構わずに一方的に自分の意見や感情を押しついたりすることを経験している。そこで、生徒の対人関係のスキルを高めたいと思い、日常生活にありがちな事例を取り上げ、どのようなコミュニケーションが有効であるかを考えさせた。

2 生徒理解

生徒の様子をインフォーマルな形式で語り合い、生徒理解を深める場として、「生徒を語る会」を設定した。「語る」の意味について調べてみると、「親しくする」「打ち解けてつきあう」とあり、そこから筆者は、結論を特に求めない場にしようという発想が浮かんだ。生徒を語る会が、先生方にとってのハードルが低くなり、思い浮かんだことを忌憚なく発言できるような場になることを期待した。なお、会の形態については、実習校の多忙な現状を踏まえ、先生方の負担にならないよう、回数は月1回、短時間で実施し、参加を義務づけなかったことにした。さらに、参加者が肩の力を抜いて、身構えずに生徒を語るができるように、お菓子を添えた。こうして、温かい雰囲気の中で語り合いがなされたことによって、生徒理解が深まっただけでなく、教師が相互理解を深め、より親和的になるきっかけにもなった。

中学校は、教科担任制や、部活動の顧問の制度など、一人の生徒に対して複数の教師の目を向けることが容易な環境である。だからこそ、教師同士が語り合う機会をもつことで、生徒を多面的に見ることができた。また、結論を求めず、それぞれの先生方が頭に浮かんだ事柄をどんどん挙げていくことで、話題に広がりや深まりが生まれた。そしてそのことが、深く豊かな生徒理解につながり、生徒を支援していくため

の道筋となった。さらに、参加した先生方にとっての一体感が生まれ、チームで生徒を支援していきこうという気持ちがより高まった。

3 学習支援

学習支援にあたっては、生徒の学力を伸ばすということだけに軸を置くのではなく、学習支援の場が生徒にとっての安心できる場になればという思いを大切にしたい。学習支援の場が生徒の心に安心感や充実感をもたらす、そこで得られる相互理解が生徒と教師の関係をより深めるものとなるよう実践に取り組んだ。

授業補助として、1年生の数学科の授業に授業補助員として入った。役割としては、あくまでも教科担任の先生の授業を補助するということに徹した。中学生が苦手とする科目として、常に数学が上位に挙がる。そこで、生徒たちが数学を学習する上でのつまづきを少しでも解消できればという思いから、数学の授業補助に取り組んだ。

実習校では「前進タイム」と名づけ、生徒が登校してから授業開始までの時間を利用し、25分間の学習時間を設けている。前進タイムでは、各教科のプリントを使った学習が進められ、定期的に確認テストが実施される。そこで、目標得点に達せなかった生徒に対して、放課後などに再試験をしたり、個別学習でフォローしたりした。生徒からは「授業中の一斉指導では分からないところを質問しにくかったが、個別に勉強を見てくれることで、質問しやすく、丁寧に教えてもらえてよかった」という声が聞かれた。

また、実習校では、家庭学習の時間を確保することと、学習する習慣を身につけることをねらいに、毎日の宿題として、生徒自身が学習する内容や進め方を決めて各教科の予習や復習に取り組む「自主勉強ノート」を課している。生

徒にとっては、自主勉強ノートは、宿題の中でも大変苦痛に感じるものであるらしい。そこで筆者は、「家庭で学習する習慣を身につけるために、どうしたら自主勉強を頑張れるか」について学習委員と考えた。その方法として、自主勉強ノートを頑張ると様々な称賛を受けることができ、さらに次も頑張りたいと思える仕組みを整えることにした。筆者は、学習委員と考えた方法がうまく機能するよう、委員たちのアドバイスやサポートに尽力した。

IV 実践研究の成果と課題

1 対人関係プログラムの成果と課題

S G Eの授業の回を追うごとに、アンケートのどの項目においても肯定的な意見が高まった。これは、生徒が中学校生活に慣れ、次第に学級が居場所の良い安心基地になっていったということであろう。このように、「S G Eを取り入れた授業」は、生徒の仲間づくりに寄与したといえる。

「アンガーマネジメントを取り入れた授業」では、気持ちが高ぶったときにこの授業で学んだことを活用できそうだという多くの生徒の声が聞かれた。ただし、怒りを悪の感情として否定するのではなく、誤った表現方法をしないようにすることが大切であることも補足説明した。生徒たちが自身の感情に目を向け、感情をコントロールできるようになるためのさらなるプログラムの開発も必要である。

「リフレーミングを取り入れた授業」では、生徒の感想から、生徒の自己理解や、他者を尊重して関わっていこうとする姿勢が深まったことが読み取れた。また、自分の短所を長所として捉えなおすことを、仲間が一生懸命考えてくれる様子を見て、仲間に対する信頼を高めることにもつながった。しかし、活動中にリフレー

ミングの言葉が思い浮かばなかった生徒もいた。授業展開の工夫が今後の課題である。

「アサーション・トレーニングを取り入れた授業」では、ほとんどの生徒がアサーティブな自己表現の良さや有用性を理解したものの、実際の場面で実践するのは難しいと感じているようであった。このことから、授業以外の場面でも活用できるような工夫が必要であると考えた。

2 生徒理解の成果と課題

「生徒を語る会」を通じて、個々の教師が見ている生徒の姿を、ひとつにつなぎ合わせる事ができた。このことから、教師の生徒理解が深まり、日常の関わり方や声がけの質が向上した。実習校の重点目標の達成のために、教師が同じ方向を向けたことは、生徒の望ましい成長に作用すると考える。

3 学習支援の成果と課題

生徒の基礎学力を高めるという目的があったのだが、思うようには達成できなかった。しかし、教師と生徒の信頼関係を強めることには有効であった。学習支援は、生徒の基礎学力を高めることだけではなく、生徒理解につながる貴重な場になった。

4 実践研究の総括

生徒の言動やアンケートで実践を振り返ると、前述のように、一定の成果や課題が認められた。本実践研究で取り扱ったスキルは、学校の中だけではなく、生活全般で必要である。生徒は学ぶ機会さえあれば、新しいことに興味を持ち、授業で学習した内容をどんどん吸収していた。このことから、学校の取り組みを家庭でも生かせるような仕組みを整え、生徒のスキルをさらに高めたいと感じた。家庭との連携についても今後、研究を深めたい。